

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 10-2

## 子どもとまんが(2)

### 目次

要 約	2
はじめに	4
1. まんがとの接触量	5
●まんが雑誌との接触	6
●まんが単行本との接触	9
●テレビまんがとの接触	13
2. 生活の中のまんが	17
●家に帰ってからしたこと	17
●まんがを読むとき・やめるとき	19
●親たちの視線の中で	21
3. 子どもの価値観とまんが	25
●自由な時間の使い方	25
●自由なお金の使い方	29
4. まんがとつきあう子の特性	32
●まんがの好みと自己像	33
●まんがの好みと行動パターン	36
地球社会の子どもたち ⑳ バンコクーその3 調査票作り	深谷昌志 38
資料1 調査票見本	44
資料2 学年・性別集計表	53

\*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	調査レポート	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	子どもとまんが(2)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	要約	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

千葉市教育センター 上杉賢士  
放送大学客員教授 深谷昌志

### 1. まんがとの接触量

いずれも1週間分に換算して、雑誌を1冊、単行本を3冊、テレビまんがを数本というのが、平均的接触量であり、この数値は9年前に比較して確実に増加している。(図2、図4、図6)



### 2. まんが接触の形態と学年差

まんが雑誌は高学年、テレビまんがは4年生がそれぞれピークを示していて、テレビから雑誌へという移行が見られる。また単行本については、顕著な学年差は見られなかった。(図2、図4、図6)

### 3. 家庭生活とまんが

家で過ごす方において、3年生が仲間遊びや外遊びなど最も充実した生活をしていた。しかし、4年生になると、まんがに関する項目が残り、学年上昇とともに次第にプアになっていく傾向が見られた。(表4)



#### ●調査概要

1. 調査主題 子どもとまんが(2)
2. 調査視点 まんがとのつきあいが日常化する傾向の中で、それが子どもたちの生活にどのような影響を及ぼすかを明らかにす

る。あわせて、vol. 1-4「子どもとまんが」で実施した結果とも比較し、時系列的な変化のようすをもとらえてみたい。

3. 調査項目 雑誌・単行本・テレビのそれぞれによるまんがとの接触量、家でしたことの中でまんがの占める比重、自由な時間

#### 4. まんがに対する親子の意見

母親たちは、決してまんがの効用を認めていないが、ほどよいつきあいさえしていればよいと思っている、と子どもたちは考えている。しかし、まんがとの接触量の最も多い4・5年生では、親子の意見のずれが最も大きくなっている。(図12、表5)

#### 5. 自由な時間の使い方

子どもたちは、自由な時間が30分であればまんがを、2時間であれば外遊びを選択する。細切れのスケジュールの中で、まんががすき間を埋める存在としての意味を持っている。(図14、図15)

#### 6. 自由なお金の使い方

500円と2,000円の使い方においては、顕著な性差が見られた。また、学年が上がるにつれて、いずれの金額でもまんがを選択する割合が急激に上昇する。(図17、図18)

#### 7. まんがと深くつきあう子の特徴

まんがとの接触量の多い子は、「テレビが好き」、少ない子は「学校が楽しく、家での手伝いをよくする」というプロフィールを描いていた。(表6、表7、表8)

#### 8. まとめ

子どもたちのまんが接触量はかなり増加傾向を示しているが、現在のところ、それは「生活のすき間を埋めるもの」として位置づいている。今後、さらに増加することが予想される中で、規則的な生活サイクルを保つ範囲内での自律的な接触が望まれよう。

やお金の使い方とまんがの選択率、など。

4. 調査時期 1989年12月
5. 調査対象 千葉市内の小学校3・4・5・6年生
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

#### 7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
3年	163	116	279
4年	127	115	242
5年	155	161	316
6年	166	157	323
計	611	549	1,160



## はじめに

本誌の発刊間もない vol. 1 - 4 で「まんが」をテーマにしたレポートをまとめた。今から9年前、昭和56年のことである。

その前年に、山口百恵が芸能界を引退し、翌年、中森明菜がデビューする。黒柳徹子の「窓ぎわのトットちゃん」が驚異的なベストセラーになったのもこの年である。

さて、それからほぼ10年が過ぎた。

この間に、子どもたちの世界に生じた異変を取り上げるとすれば、「いじめ」と「ファミコンブーム」の2つになろう。そして、そのいずれもが、仲間や周囲にいる人々と確かな人間関係を結べないでいる子どもたちの危機的な状況を示唆している。

一方、まんがに関して生じた変化に注目すれば、まんがの持つメディアとしての側面がクローズアップされたといえよう。

例えば、近年、経済や歴史・宗教といった分野の内容をマンガ化した出版が相次いでいる。企業の新人研修のマニュアルにも、まんがが大幅に進出した。

もちろん、そうした変化は、活字離れや「映像人間」化といった読者層の変化に対応してのことであろう。

そして、考えてみれば、その読者層のかなりの比重を占める現代の若者たちは、前回の調査時にはほぼ小学生であった。つまり、前回のレポートに見られるまんがと深くつきあう子どもたちの姿が、今日の出版事情を揺るがす伏線としての意味を持っていたのである。

本レポートでは、そうした点も視野に入れながら、改めて子どもとまんがの接触状況をとらえ直してみる。10年前と現在を結ぶ延長線上に、果たしてどのような変化が予測されるのであろうか。

# 1. まんがとの接触量



公称500万部という「少年ジャンプ」を筆頭にして、子ども向け週刊まんが雑誌の発行部数は、近年急激な伸びを示している。そして、雑誌連載後という手順を省略して発行されるおびただしい数のまんが単行本がある。

この二種類のまんがに共通するのは、読者層が中・高校生やおとなにも拡大され、決して子どもだけの専有物ではなくなってきている点にある。したがって、そうした動向を視野に入れた編集がなされているものの、多くの子どもたちが目を通してきている事実は変わらない。

子ども向けのまんが環境について言えば、さらに、1週間の放送本数が各キー局合計で、

30本を超えるテレビまんがを加える必要がある。

さて、以上の3つのタイプのまんがは、内容もさることながら、それぞれに異なる媒体としての特徴を持っている。

例えば、テレビまんがは原則として見る時間帯が放送される時間によって規定される。これに対して、まんが単行本は、ひとまず入手しておけば、好きなときに見ることができる。子どもたちの生活に及ぼす影響は、おのずと異なるであろうことが推測される。

今回はそうした点を視野に入れながら、まず、それぞれのまんがへの接触状況を具体的にとらえる作業から始めたい。

## ☉☉ まんが雑誌との接触 ☉☉

まず、図1に、ウィークリーが主流となっているまんが雑誌をどのくらい買うかをたずねた結果を掲げた。

それによると、「ほとんど毎週買う」までを加えた定期購読層は、約4割であることがわかる。しかし、図の下半分に示した学年別の推移を見ると、3年生の24%から5年生の53%と、かなり大きな差が認められる。

どうやらまんが雑誌については、小学校高学年あたりから熱心なファン層が形成される

傾向がありそうである。

ちなみに各学年・性別で200名を無作為に抽出し、「いちばん好きなまんが雑誌」を記入してもらった結果を、表1に掲げた。

それによると、男子では『少年ジャンプ』、女子では『りほん』がまんが雑誌の代表格であるが、それを選択する人数は、学年上昇とともに急激に増加している。すでに述べたように、それらの雑誌が幾分上の年齢層をもターゲットに含めた内容構成になっていること

図1 まんが雑誌をどのくらい買うか

		(%)				
		週1冊	毎週1冊	ほとんど毎週	ときどき	買ったことがない
男	子	7.8	10.3	21.7	46.5	13.7
女	子	9.2	15.0	20.0	36.0	19.8
3	年	4.0	14.9	50.0		26.4
4	年	7.0	10.7	24.0	43.4	14.9
5	年	16.1	16.2	25.5	32.9	14.3
6	年	10.1	17.6	19.2	41.5	11.6

を考えれば、当然の結果であろう。

次に図2には、「まんが雑誌をどのくらい読むか」をたずねた結果を掲げた。

ここでも、「だいたい毎週1冊くらい読む」以上を「読者層」とすれば、男子の7割、女子の5割がそれに該当する。男子の「定期購読層」は約4割であったから、自分では買わないが読んでいるという層がかなり存在することがわかる。ちなみに、女子では2つの層の割合が近似していて、「自分で買ったものしか読まない」という傾向が顕著である。

そしてここでも、5年生・6年生あたりにピークがある。高学年の子どもたちの3人に2人は、毎週何らかのまんが雑誌を1冊以上

は読んでいる計算になる。

さてこの接触量を、前回の調査結果（昭和56年実施）と比較してみよう。

参考1は、本誌vol. 1-4「子どもとまんが」より引用したものである。それによると、幾分スケールが異なるが「固定読者層」は、ほぼ3人に1人という結果であった。この約10年の間に、子どもたちのまんが雑誌への接触量はかなりふえている。

そうした傾向を裏づけるように、去年の接触量と比べた結果（図3）では、いずれの層の子どもたちも、幾分「まんがづけ」の傾向が強まったと告白している。

表1 人気まんが雑誌

(人)

	3 年		4 年		5 年		6 年	
男 子	少年ジャンプ	79	少年ジャンプ	64	少年ジャンプ	88	少年ジャンプ	114
	コロコロコミック	45	コロコロコミック	29	コロコロコミック	35	コロコロコミック	22
	コミックボンボン	5	コミックボンボン	7	コミックボンボン	6	少年サンデー	2
	小学三年生	2	小学四年生	4	ヤングジャンプ	2	小学六年生	2
女 子	りぼん	50	りぼん	65	りぼん	77	りぼん	92
	なかよし	20	なかよし	22	なかよし	22	なかよし	21
	ぴよんぴよん	7	少年ジャンプ	4	少女コミック	4	別冊マーガレット	9
	コロコロコミック	4	ぴよんぴよん	3	ちゃお	4	少女コミック	5
	小学三年生	4	コロコロコミック	2	小学五年生	4	ちゃお	4
			少年マガジン	2				
			小学四年生	2				

(数値は、各学年・性別200名中の選択人数)

図2 まんが雑誌をどのくらい読むか

		(%)				
		毎週3冊以上	毎週2冊くらい	だいたい毎週1冊	ときどき読むくらい	ぜんぜん読まない
男	子	25.5	15.2	28.6	24.5	6.2
女	子	14.8	14.9	20.9	42.8	6.6
3	年	14.7	10.4	21.9	41.9	11.1
4	年	24.8	15.3	20.7	34.2	5.0
5	年	22.5	19.0	25.0	27.8	5.7
6	年	20.1	15.2	30.7	30.0	4.0

参考1 まんが雑誌をどのくらい読んでいるか

		(%)		
		固定層 (毎週1冊以上)	中間層 (ときどき読む)	無関心層 (ぜんぜん読まない)
4	年	33.6	44.4	22.0
5	年	31.1	52.5	16.4
6	年	39.4	47.1	13.5

(モノグラフ・小学生ナウ Vol.1-4 「子どもとまんが」より)



図3 去年に比べて（まんが雑誌を読む量）

	少し+ずっと少なくなった	同じくらい	少し+ずっと少なくなった
男子	39.1	37.7	23.2
女子	34.3	37.4	28.2
3年	33.1	39.3	27.6
4年	39.1	37.0	23.9
5年	37.2	37.3	25.5
6年	38.2	36.7	25.1

## ☉☉ まんが単行本との接触 ☉☉

次に、まんが単行本との接触状況を見てみよう。

図4は、1週間分をトータルすると読んだまんが単行本の数はどのくらいになるかをたずねた結果である。

それによると、まず性差が顕著であることが読み取れる。「1週間に3～5冊」以上に注目すれば、男子の47%がそれに該当するのに対して、女子は34%でしかない。前に見たまんが雑誌が男女ともほぼ同じ数値を示していたことを考えれば、このまんが単行本は、男の子向けであると考えられそうである。

またここでは、まんが雑誌とは逆に学年差はほとんどない。今回の調査では、まんがに接触する層が広がったことを予測して、対象

を3年生にまで引き下げた。その3年生ですら、すでに約4割の子どもたちは1週間に数冊のまんが単行本を読んでいる。

その内容を表2から読み取ると、男子に圧倒的な人気のある「ドラゴンボール」は別格として、学年・性別によって、それぞれ支持するまんがが異なっている。これは、すでに見てきたように、男女それぞれ2冊ずつで大半を占めていたまんが雑誌の選択傾向とは大きく異なる特徴といえそうである。

つまり単行本の体裁であれば、低学年のうちから自分の興味に合ったまんがを選ぶことができるのである。

一方、男子の「ドラゴンボール」に相当する超人気作品が女子には見当たらない。この

点も、接触量に性差を生じさせるひとつの要因になっているのであろう。

次に、まんが雑誌の場合と同様に、前回の調査結果と比較してみよう。図4と参考2を合わせてご覧いただきたい。

全体として「1週間に10冊以上」あるいは「毎日1冊くらい」という層は、両者にそれほど差が認められない。つまり、まんがに熱中する層は、ここ10年の間にそれほど増加していない。

しかしその一方で、「ほとんど読まない」という子どもたちは、10%ほど減少していることがわかる。したがって、1週間に換算して「1～2冊」あるいは「3～5冊」という、いわゆる中間層がかなり増加したことになる。

前回の調査レポートでは、特定の熱中派を除けば、子どもたちの多くは決してまんがにのめりこんでいるわけではないことを指摘し

た。しかし、ここに示したデータは、まんがとつきあう層が確実に拡大してきていることを示唆している。

さて、まんが単行本が持つ特徴のひとつは、保存性の点である。まんが雑誌が発売日を頂点にして以後はほとんど読まれないのに対して、単行本はページをめくる期間が比較的長い。

その点を考慮して図5には、まんが単行本の所有数を掲げた。

やはり前回の結果と比較すれば(参考3)、全体として、所有数はかなりふえている。子どもたちの書棚にも、まんが本の占めるスペースが徐々に拡大されているのであろう。

さて、今回のデータでもうひとつ特徴的なことは、所有数においては、学年によってかなり顕著な差が認められる点である。すでに見てきたように、「読む量」においては、ほと

図4 まんが単行本をどのくらい読むか(1週間で)

		(%)				
		1週間で10冊以上	毎日1冊くらい	3～5冊	1～2冊	ほとんど読まない
男	子	13.4	9.0	24.9	29.7	23.0
女	子	4.6	9.8	19.8	34.6	31.2
3	年	13.5	7.7	21.7	32.7	29.4
4	年	13.0	8.9	22.4	35.3	22.4
5	年	8.0	11.6	20.6	31.2	28.6
6	年	9.7	9.1	25.0	29.6	26.6

んど差がなかった。つまり低学年の子どもたちは、同じ単行本をくり返し読む傾向にある。これに対して、高学年になると、とりあえず

自分の手元にはたくさんの単行本を確保しておくものの、それほど同じものを頻繁に読むわけではないことがわかる。

表2 人気まんが単行本

		3 年		4 年		5 年		6 年	
男	ドラゴンボール	59	ドラゴンボール	50	ドラゴンボール	42	ドラゴンボール	51	
	ドラえもん	15	ドラえもん	15	キャプテン翼	14	ろくでなしブルース	10	
	つるぴかはげ丸くん	9	ついでにトンチンカン	6	キン肉マン	10	らんま $\frac{1}{2}$	8	
	おぼっちゃまくん	8	おぼっちゃまくん	3	ダッシュ四駆郎	8	パトレイバー	6	
	キャプテン翼	4	名門第三野球部	3	ドラえもん	6	キン肉マン	5	
	キン肉マン	4	コボちゃん	3	ろくでなしブルース	6	ドラえもん	5	
子	ついでにトンチンカン	4					湘南爆走族	5	
	ドラえもん	9	ときめきトゥナイト	11	らんま $\frac{1}{2}$	14	あさりちゃん	14	
	ときめきトゥナイト	9	らんま $\frac{1}{2}$	10	星のひとみのシルエット	13	らんま $\frac{1}{2}$	13	
	らんま $\frac{1}{2}$	7	ちびまるこちゃん	8	ときめきトゥナイト	11	ときめきトゥナイト	11	
	あさりちゃん	7	ハンサムな彼女	6	あさりちゃん	11	ちびまるこちゃん	6	
	Dr スランプ	4	ドラえもん	6	ドラえもん	9	ホットロード	4	
子							白鳥麗子でございます	4	
							ハンサムな彼女	4	
							ろくでなしブルース	4	

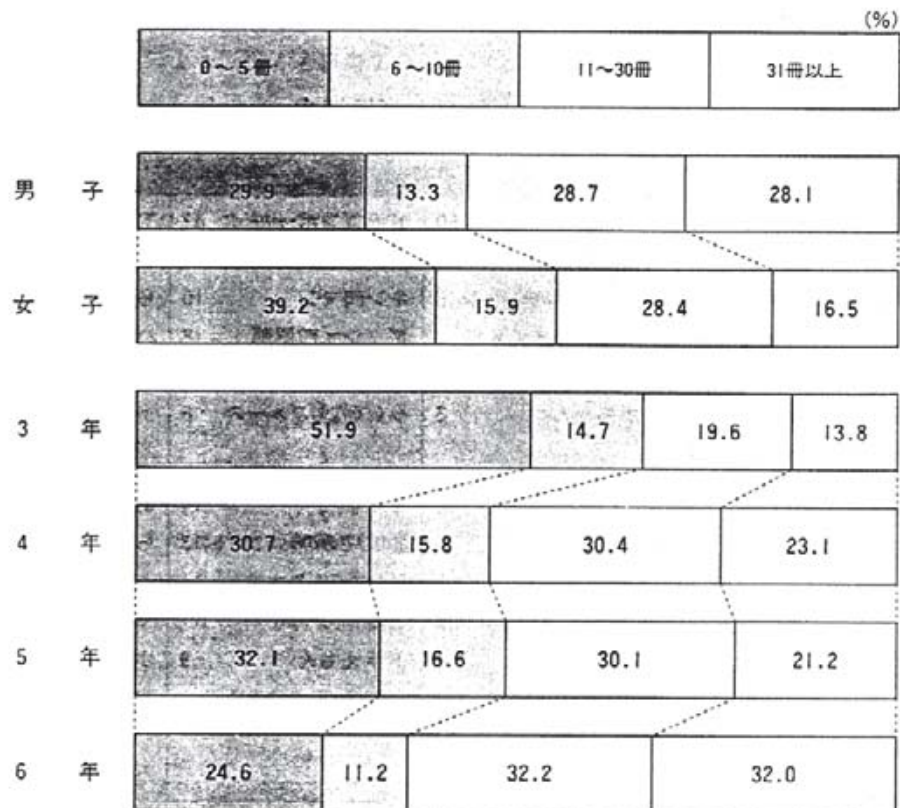
(数値は、各学年・性別200名中の選択人数)

参考2 1週間に読むまんが単行本の数

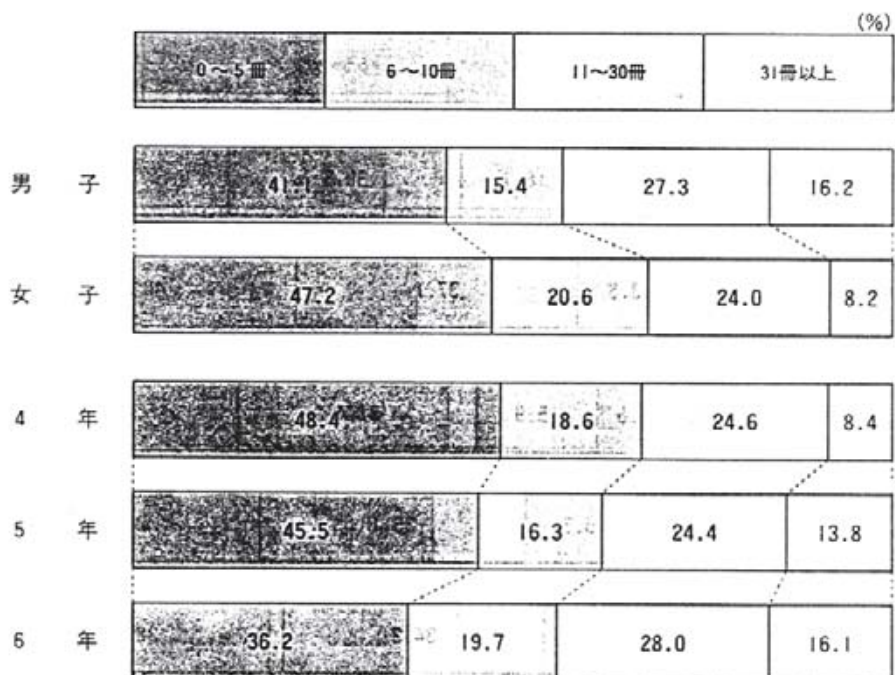
		10冊以上	毎日1冊くらい	3~5冊	1~2冊	ほとんど読まない
男 子	4 年	12.2	9.2	16.7	30.5	31.4
	5 年	8.5	5.3	13.8	37.1	40.2
女 子	4 年	10.5	9.6	15.9	31.4	32.8
	5 年	7.0	6.8	15.5	35.1	35.6
	6 年	7.1	5.4	14.4	34.3	38.8

(モノグラフ・小学生ナフ Vol.1-4 「子どもとまんが」より)

図5 まんが単行本の所有数



参考3 まんが単行本の所有数



(モノグラフ・小学生ナウ Vol.1-4 「子どもとまんが」より)

## ☉☉ テレビまんがとの接触 ☉☉

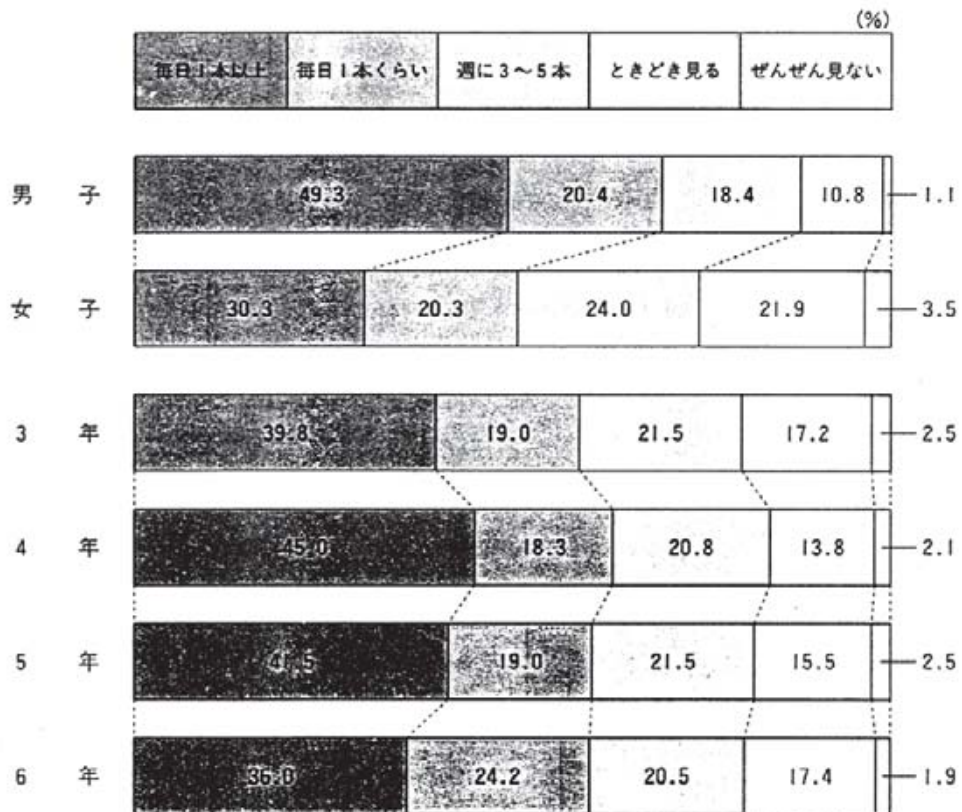
本章の最後に、テレビまんがとの接触状況を見ておくことにしたい。

現在、各テレビ局から放送されるテレビまんがは、1日平均で約4本。1週間に換算す

ると30本以上が定時放送されている。したがって、チャンネルを切り換えさえすれば、テレビまんがの“はしご”も可能である。

そうした事情を考慮してスケールを作成し、

図6 テレビまんがをどのくらい見るか



テレビまんがとの接触量をとらえたのが図6である。

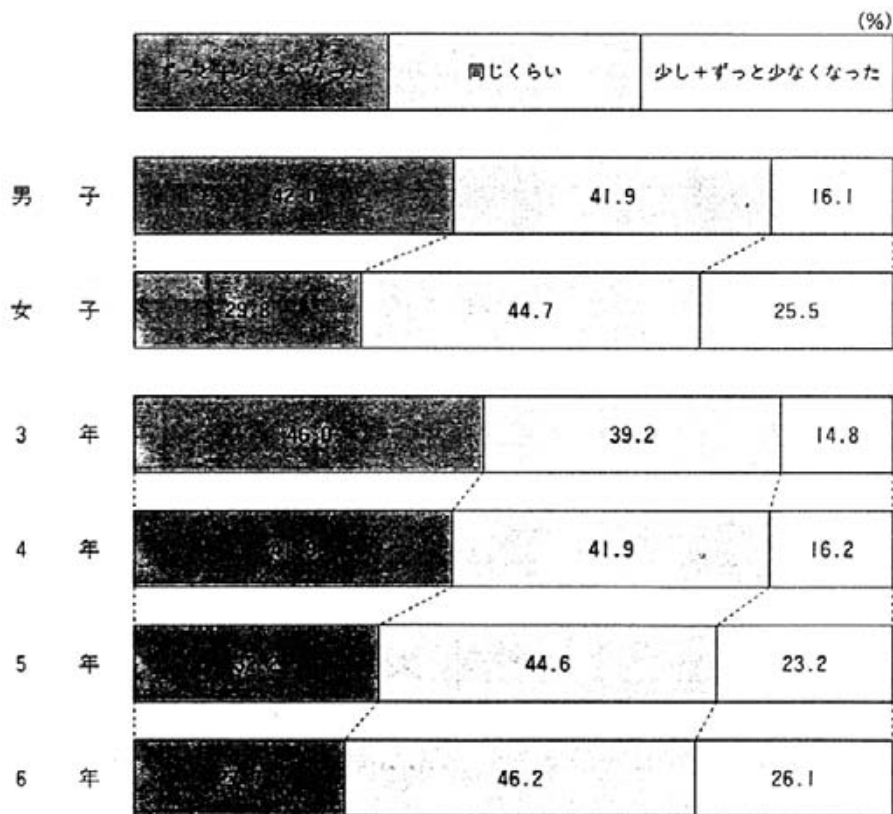
「毎日1本以上」、つまりテレビまんがの“はしご”をする層は、実に男子の5割、女子の3割にもなる。これに「週に3～5本」までの層を加えれば、子どもたちのほぼ8割は、テレビまんがにかなりの関心と視線を向けていることになる。

しかし学年別に見ると、ほぼ4年生をピー

クとして、次第に熱中の度合いは低下していく。すでに見てきたように、雑誌は高学年の子どもたちの接触量が最も多かった。このデータも合わせて考えると、学年が上がるとともに、テレビまんがからまんが雑誌へという転換が4年生あたりを境にして生じていることが推測される。

そうした傾向は、図7からも読み取れる。去年に比べてテレビまんがを見る量が「多く

図7 去年に比べて（テレビまんがを見る量）



なった」という層は、学年上昇とともに急激に減少し、代わって、「少なくなった」という層が増加する。

子どもたちの生活ぶりを推測すれば、次第に多忙になっていくスケジュールの中で、時間的な制約の大きいテレビまんがは、接触しにくくなっていくのであろう。

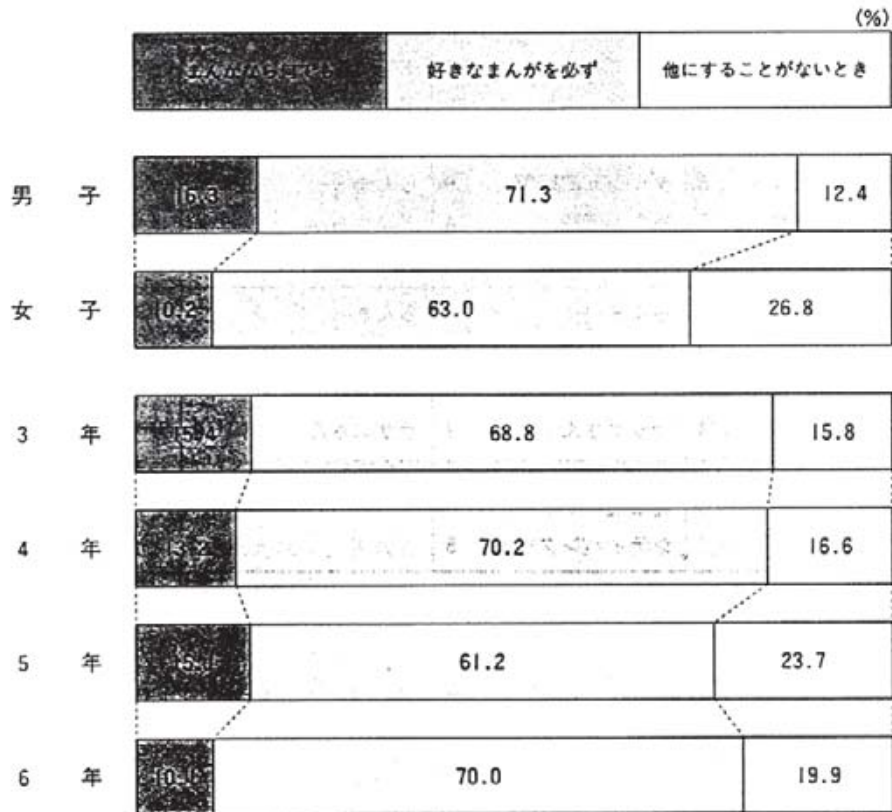
念のため、テレビまんがの選択の仕方をたずねた結果を、図8に示した。

それによると、「好きなまんがを必ず見る」という層が大半を占め、選択的視聴の態度が定着したかに見える。しかし、「好きなまんが」の数がふえれば、それによって接触量がコントロールされるという実質的な機能は果たさなくなる。

そこでこれまでと同様に、人気テレビまんがの一覧を、表3にまとめた。

ここでも、「ドラゴンボールZ（『ドラゴン

図8 テレビまんがの選び方



ボール』の主人公が成長した後のストーリー」が、男子からは圧倒的な人気を集めている。そして、女子においては、特定の人気テレビまんがが存在せず、それぞれの学年に固有の選択状況が認められる。このパターンは、まんが単行本の場合と全く同様である。

以上、異なる3つのタイプのまんがについて、子どもたちの接触状況を明らかにしてきた。それぞれのタイプの持つ性格や条件の違

いから、子どもたちの接触ぶりは微妙に異なっていた。そうした違いが、子どもたちの生活や価値観に対してどのような影響を及ぼしているかは、章を改めて考察することにした。

いずれにしても全体としては、ここ10年間の変化として、まんがが一層強く子どもたちの生活に関わりを持つようになってきている。

表3 人気テレビまんが

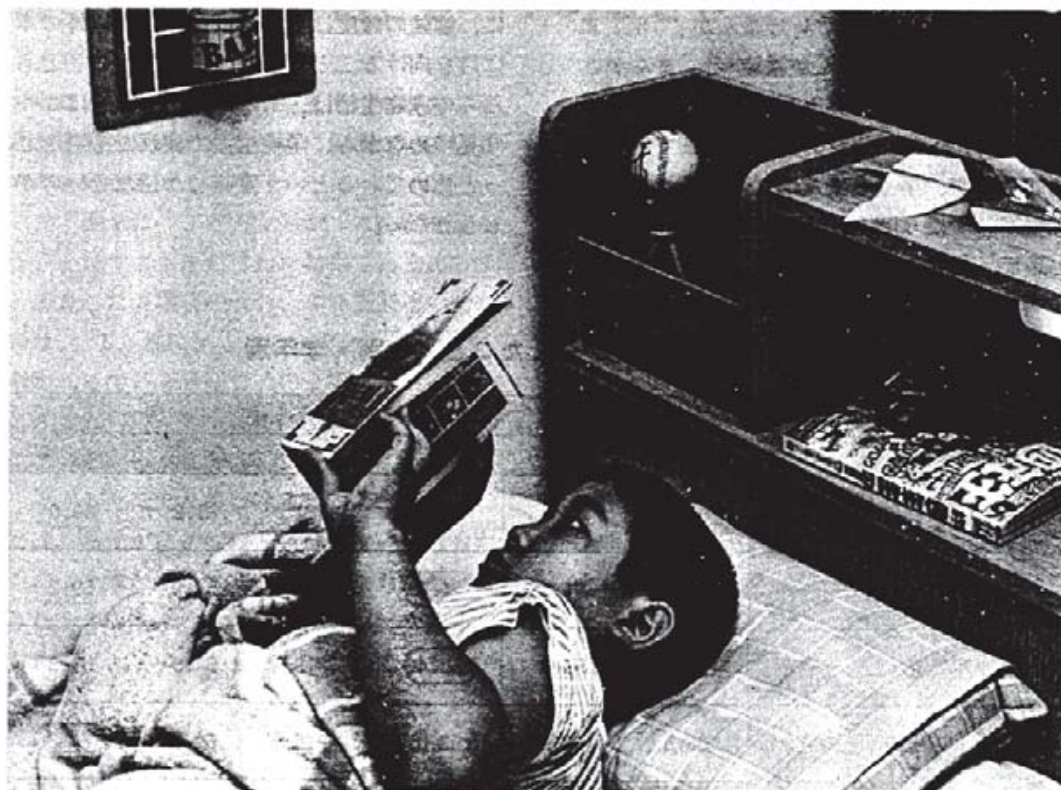
(人)

	3 年		4 年		5 年		6 年	
男 子	ドラゴンボールZ	96	ドラゴンボールZ	57	ドラゴンボールZ	75	ドラゴンボールZ	86
	ドラゴンクエスト	12	ドラゴンクエスト	32	ドラゴンクエスト	21	ドラゴンクエスト	24
	ドラえもん	8	ドラえもん	15	キン肉マン	5	シティハンターIII	16
	おぼっちゃまくん	8	ダッシュ四駆郎	5	らんま $\frac{1}{2}$	4	バトレイバー	9
	ダッシュ四駆郎	5	桃太郎伝説	4	ドラえもん	4	ドラえもん	4
							らんま $\frac{1}{2}$	4
女 子	らんま $\frac{1}{2}$	25	らんま $\frac{1}{2}$	22	らんま $\frac{1}{2}$	23	ドラゴンボールZ	37
	ドラえもん	23	ドラえもん	14	ドラゴンボールZ	22	らんま $\frac{1}{2}$	17
	サザエさん	10	ドラゴンボールZ	8	ドラえもん	21	ドラえもん	13
	ピーターパン	8	サザエさん	7	サザエさん	19	サザエさん	12
	ドラゴンボールZ	6	アイドル伝説えり子	5	YAWARA!	7	シティハンターIII	8
	魔法使いサリー	6	魔法使いサリー	5				
			シティハンターIII	5				

(数値は、各学年・性別200名中の選択人数)



## 2. 生活の中のまんが



前章では、一部の熱狂的なまんがファンと、その周辺に位置してまんがと適度なつきあい方をしているかなり広範囲の子どもたちの存在が明らかになった。言い換えれば、現代の子どもたちにとって、まんがとのつきあいが

日常化している状況がうかがえた。

そこで本章では、改めて日常の生活の中にまんががどのように位置づいているかを確かめてみることにしたい。

### ⊕⊕家に帰ってからしたこと⊕

まず表4は、遊びから勉強までを含む12項目について、この1か月くらいの間にそれぞれ家でどのくらいしたかをたずねた結果である。表中の○の数値は、同一項目内の最大値を、～は最小値を表す。なお、それは数値間に5%以上の差がある場合に限った。

性別を見ると、「1. テレビのまんがを見た」や「2. 友達と遊んだ」に代表されるように、男子に遊びに関する項目の数値が高い。

そして「7. 宿題」や「9. 塾や習い事」など勉強に関しては、男女ほぼ同程度の数値を示している。

一方、学年別のデータでは、全体として、学年が上がるにつれて、数値は低下する傾向にある。これは、帰宅時間が遅くなることによって、家で過ごす時間的な絶対量が少なくなっていることの影響といえよう。

その中で、3年生の子どもたちは、よく遊

び、よく学びと充実した家庭生活を送っているようすがうかがえる。そして4年生になると、その中から「1. テレビまんが」「8. まんが単行本」「10. まんが雑誌」と、まんがとの接触を示す項目が突出してくる。高学年の子どもに比べれば比較的多く残されている時間的余裕が、早くもまんがに吸収されていく実情は、やはり問題視せねばなるまい。

さて、学年が上がるにつれて数値が上昇す

る項目は、わずかに「4. まんが以外のテレビを見た」の1項目だけである。意外なほどに、勉強の頻度は上昇せず、教科書以外の本に目を向けることもしない。6年生の子どもたちの家庭生活は、あるいはテレビをぼんやり見つめながら、学校生活で疲れた心身をじっと休めているという意味しか持たないのかもしれない。

表4 家に帰ってからのこと×性別・学年別

(%)

	性別		学年別			
	男子	女子	3年	4年	5年	6年
1. テレビのまんがを見た	87.3	77.3	81.7	85.4	83.8	80.0
2. 友だちと遊んだ	73.0	61.4	74.6	73.5	64.9	59.2
3. 家の外で遊んだ	73.5	59.3	80.4	68.9	64.9	55.3
4. まんが以外のテレビを見た	66.5	62.2	52.0	59.0	69.0	74.8
5. 教科書以外の本を読んだ	42.4	50.3	56.8	44.0	43.1	41.7
6. 家の手伝いをした	35.9	56.9	49.6	44.5	43.6	45.9
7. 宿題以外の勉強をした	40.3	41.9	44.2	35.3	40.1	43.6
8. まんがの単行本を読んだ	44.6	34.2	35.6	45.5	36.9	41.5
9. 塾や習い事に行った	36.5	38.9	35.7	41.1	39.2	35.2
10. まんがの雑誌を読んだ	42.5	31.2	32.1	44.3	36.2	37.0
11. ビデオを見た	38.3	29.8	40.6	37.3	31.8	28.8
12. テレビゲームをした	47.6	11.4	40.1	33.9	23.8	26.3

○ は最大値  
 ~~~~~ は最小値

ほとんど毎日した 1 ————— 2 ————— 3 ————— 4 ————— 5  
 週に3~4回した 週に1~2回した 月に1~2回した ぜんぜんしなかった  
 %

## ☉☉ まんがを読むとき・やめるとき ☉☉

次に、再度まんがに焦点をあてながら、それが家庭生活のどんな場面に位置づいているのかを確かめてみよう。

まず図9は、子どもたちが「まんがを読もう」と思うときをたずねた結果である。

用意した8項目のうち、高い支持率を得たのは、「1.他にすることがないとき」「2.雨がふっている日曜日」の2項目であった。まんがは、決して積極的につきあおうとする相手ではないようである。

そうした傾向を裏づけるように、次の図10には、まんがにそれほど執着しない子どもたちのようすが示されている。友だちが遊びにきたときはもちろん、見たいテレビや宿題があれば、大半の子どもたちはいつでもまんが

を読むのをやめるというのである。

どうやら、まんがは家庭生活の中ではあくまで脇役でしかないようである。

さらに図11では、多くの子どもたちの「まんがを読むのは、せいぜい中学生くらいまで」という胸の内が示されている。

とはいえ冒頭でも指摘したように、まんがのファン層は、現在大学生や成人くらいにまでかなり拡大されている。決して身を滅ぼすほどの深いつきあいをするわけではない。しかし、かといって簡単に関係を断ち切れるわけでもない。子どもにとって、まんがとは、そんないささか面倒な交際相手なのかもしれない。

図9 まんがを読もうと思うとき

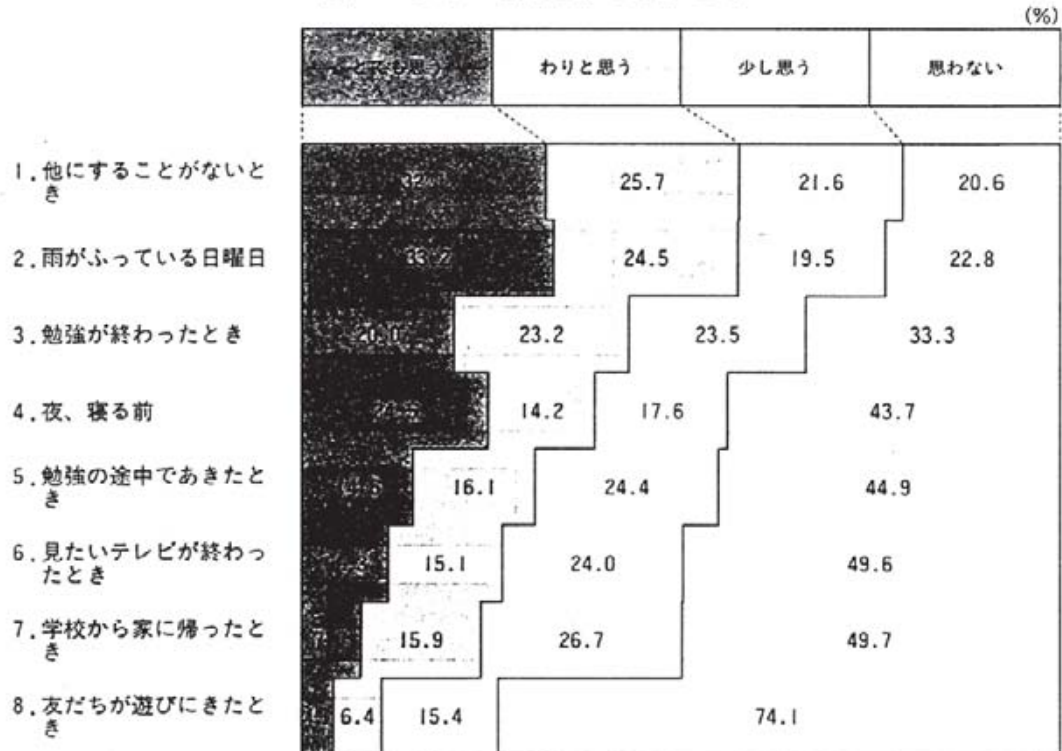


図10 まんがを読むのをやめるとき

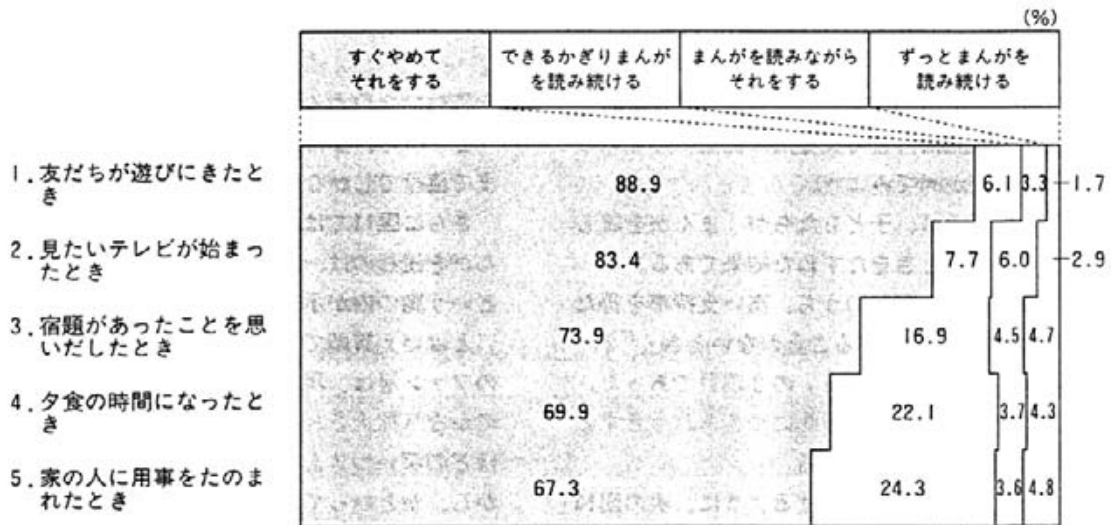
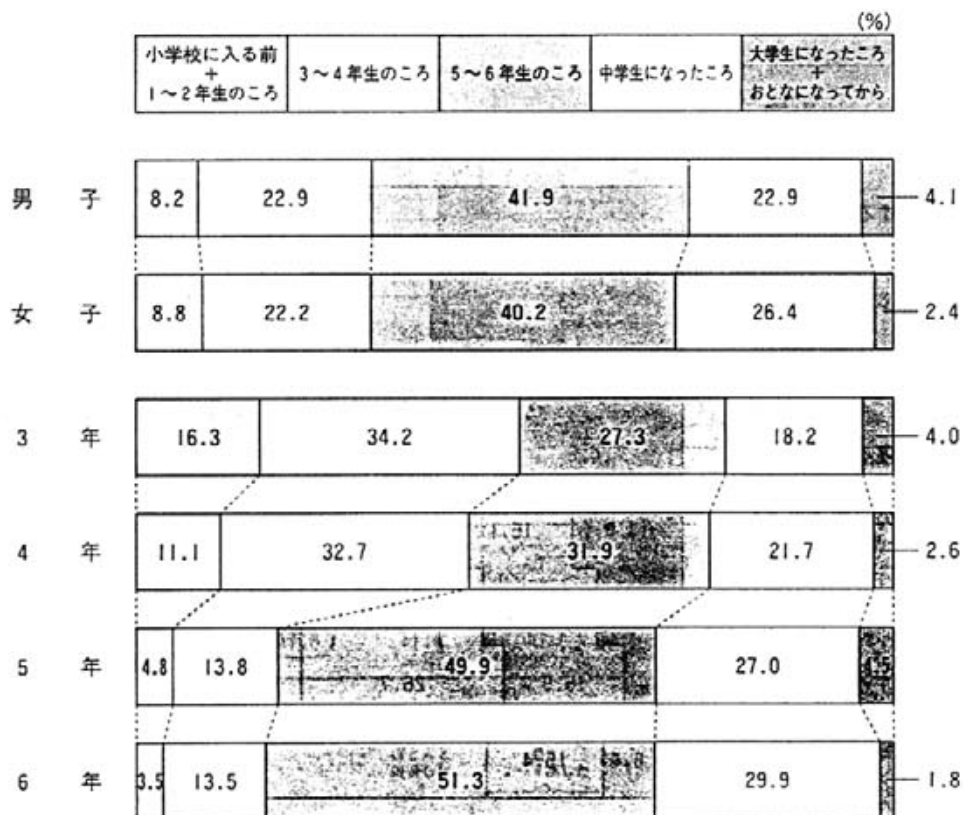


図11 まんがを最もたくさん読む時期



## ⊕⊕ 親たちの視線の中で ⊕

これまで見てきたように、子どもたちはまんがとかなり抑制のきいたつきあい方をしてきた。その理由のひとつとして、親からのコントロールの度合いに注目しておこう。

図12は、まんがに対する肯定・否定両面から15項目の意見を用意し、まず母親の思惑を推測させた結果である。

上位の4項目は、まんがとのつきあい方の原則を示している。親たちは、節度をわきまえたつきあいを望み、決して罪悪視しているわけではない、と子どもたちは見ている。

そして5位以下の中段には、まんがに対する否定的な見解が並ぶ。さすがに下位の4項目のように、まんがの効用を積極的に認める親たちは極めて少ないとも思っている。

決してまんがをすすめるはしないが、ほどよいつきあい方でさえあれば、まあ大目に見ておこう。——子どもの目に映る親たちの表情は、ひとまずこんなまとめになるだろうか。

それでは、子どもたち自身はどう考えているのだろうか。そして、子どもたちの意見と親の思惑がどのような関係にあるのだろうか。それをとらえようとしたのが、図13である。

全体として、上位と下位ほぼ半数ずつの項目の重なり方が明らかに異なっている。

子どもたちは、親が考えているより幾分か、まんがには害がないと思い、もっと深いつきあいを望んでいる。しかしさすがに、まんがが性格を明るくしてくれたり頭をよくし

てくれたりするとは思っていない。

それにしても、全体としては両者はかなり似かよった曲線を描いている。おそらく、子どもたちは親の思惑をかなりの確に感じとって自らをコントロールしているのであろう。そして実は、それこそが親たちの思うつぼだったのではあるまいか。

念のため表5には、この結果を学年別にまとめた。表は、各セルの左上に母親の思惑に対する推測値を、右上に子どもたち自身の意見を、そして下に両者の差を示す形でまとめている。

各項目における最大値を示す○に注目して結果を読み取ると、親子の意見に最もずれが大きいのは、4年生と5年生である。逆に、最もずれが小さいのが3年生である。

言い換えれば、低学年の子どもたちは、親の思惑をほぼ全面的に受け入れる方向で、自らの“まんが観”を形成している。そして、そこからの逸脱をもくろみ、自己主張する段階を経て、再びもとのさやにおさまっていく。

小学校中・高学年のおわずか数年間の中で、こうしたサイクルが認められるのである。子どもたちの側からすれば、決して強硬に禁止するつもりでもない親の意向にそったほうが、むしろ有利だというしたたかな計算が成り立つ。案外、そうした事情が今のまんがブームを支えているのかもしれない。

図12 まんがについて、お母さんが思っていること

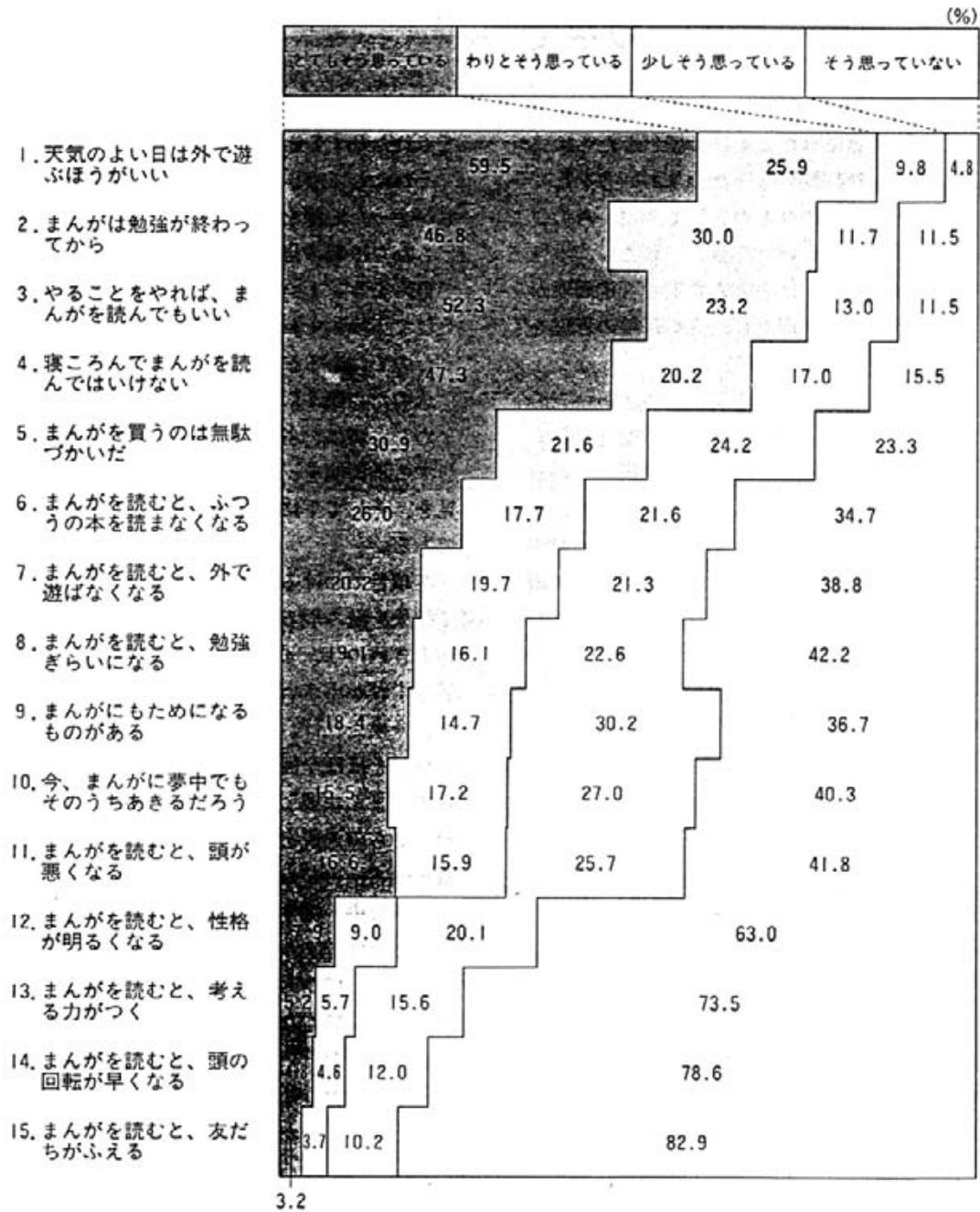


図13 親子の意見のずれ

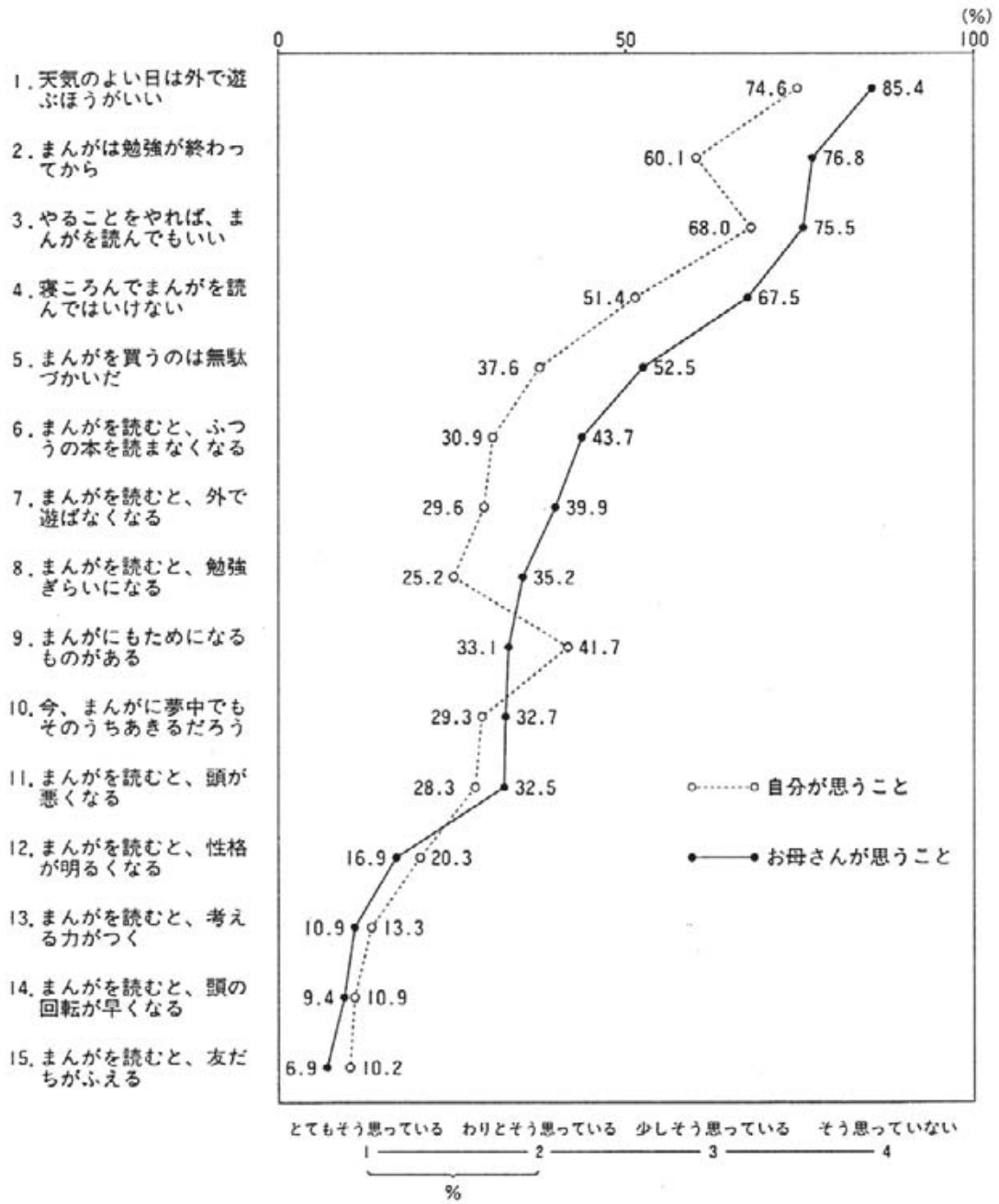


表5 親子の意見のずれ×学年別

(%)

|                            | 3年   |      | 4年    |      | 5年   |      | 6年    |      |
|----------------------------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|
|                            | 母親   | 自分   | 母親    | 自分   | 母親   | 自分   | 母親    | 自分   |
| 1. 天気のよい日は外で遊ぶほうがいい        | 87.4 | 78.6 | 87.6  | 74.1 | 87.9 | 74.4 | 79.8  | 72.0 |
|                            | 8.8  |      | 13.5  |      | 13.5 |      | 7.8   |      |
| 2. まんがは勉強が終わってから           | 74.7 | 68.1 | 79.4  | 58.2 | 80.3 | 59.3 | 73.5  | 55.4 |
|                            | 6.6  |      | 21.2  |      | 21.0 |      | 18.1  |      |
| 3. やることをやれば、まんがを読んでもいい     | 75.1 | 65.9 | 72.3  | 58.0 | 78.8 | 71.2 | 74.9  | 74.2 |
|                            | 9.2  |      | 14.3  |      | 7.6  |      | 0.7   |      |
| 4. 寝ころんでまんがを読んでもいけない       | 67.4 | 60.9 | 67.7  | 50.2 | 73.5 | 52.9 | 61.5  | 42.6 |
|                            | 6.5  |      | 17.5  |      | 20.6 |      | 18.9  |      |
| 5. まんがを買うのは無駄づかいだ          | 59.0 | 51.2 | 49.8  | 39.4 | 54.1 | 34.9 | 47.3  | 27.3 |
|                            | 7.8  |      | 10.4  |      | 19.2 |      | 20.0  |      |
| 6. まんがを読むと、ふつうの本を読まなくなる    | 44.0 | 36.0 | 46.6  | 32.2 | 49.7 | 31.4 | 35.5  | 24.9 |
|                            | 8.0  |      | 14.4  |      | 18.3 |      | 10.6  |      |
| 7. まんがを読むと、外で遊ばなくなる        | 40.9 | 35.0 | 46.2  | 30.2 | 42.1 | 31.6 | 32.2  | 22.7 |
|                            | 5.9  |      | 16.0  |      | 10.5 |      | 9.5   |      |
| 8. まんがを読むと、勉強ぎらいになる        | 47.8 | 36.7 | 38.1  | 29.6 | 33.0 | 18.5 | 24.4  | 18.3 |
|                            | 11.1 |      | 8.5   |      | 14.5 |      | 6.1   |      |
| 9. まんがにもためになるものがある         | 32.6 | 37.9 | 33.6  | 46.1 | 39.4 | 45.5 | 27.0  | 37.9 |
|                            | -5.3 |      | -12.5 |      | -6.1 |      | -10.9 |      |
| 10. 今、まんがに夢中でもそのうちあきらまるだろう | 39.0 | 38.3 | 31.9  | 29.1 | 30.0 | 25.9 | 30.5  | 24.9 |
|                            | 0.7  |      | 2.8   |      | 4.1  |      | 5.6   |      |
| 11. まんがを読むと、頭が悪くなる         | 42.9 | 43.8 | 33.9  | 30.3 | 33.8 | 22.9 | 21.2  | 18.6 |
|                            | -0.9 |      | 3.6   |      | 10.9 |      | 2.6   |      |
| 12. まんがを読むと、性格が明るくなる       | 23.9 | 26.7 | 21.3  | 25.5 | 15.5 | 16.3 | 9.0   | 14.8 |
|                            | -2.8 |      | -4.2  |      | -0.8 |      | -5.8  |      |
| 13. まんがを読むと、考える力がつく        | 12.9 | 14.2 | 11.2  | 18.5 | 11.6 | 12.3 | 8.1   | 10.1 |
|                            | -1.3 |      | -7.3  |      | -0.7 |      | -2.0  |      |
| 14. まんがを読むと、頭の回転が早くなる      | 15.1 | 13.3 | 8.4   | 14.4 | 8.1  | 9.1  | 6.5   | 8.2  |
|                            | 1.8  |      | -6.0  |      | 1.0  |      | -1.7  |      |
| 15. まんがを読むと、友だちがふえる        | 8.7  | 10.3 | 6.8   | 13.1 | 8.4  | 10.0 | 4.1   | 8.2  |
|                            | -1.6 |      | -6.3  |      | -1.6 |      | -4.1  |      |

○は最大値

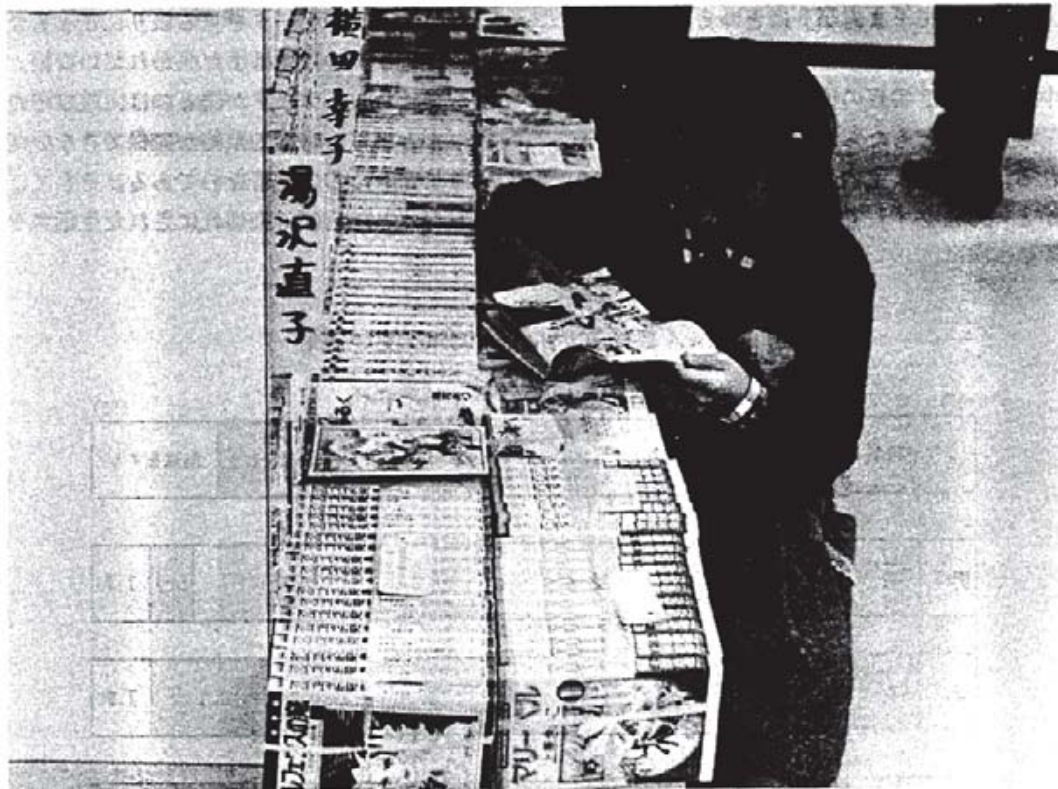
|       |    |
|-------|----|
| 母親    | 自分 |
| 母親—自分 |    |

とてもそう思っている 1 — 2 — 3 — 4  
 わりとそう思っている 2  
 少しそう思っている 3  
 そう思っていない 4

%



### 3. 子どもの価値観とまんが



本章では、状況設定型の2種類4項目の質問によって得られた結果を中心に考察する。

まず、何もしなくていい自由な時間の使い方に関して、6つの選択肢を用意して回答を求めた。そして時間を、30分と2時間の2つ

に設定した。

次に、何に使ってもいい自由なお金の使い方を5つの選択肢を提示してたずねた。金額は、500円と2,000円の2つである。

#### 自由な時間の使い方

まず図14は、30分の自由な時間の使い方をたずねた結果である。

性別を見ると、男子の「テレビゲーム」と女子の「読書」がそれぞれ目立つが、他はそれほど差がない。全体としては、「まんが」「外遊び」「テレビ視聴」の順に選択されていることがわかる。

次に学年別では、「外遊び」と「読書」が学

年上昇とともに減少し、それに代わって「テレビ視聴」がかなりの比重を占めるようになる。

その中で「まんが」は、これまでのデータを裏づけるかのように、5年生の選択率が最も高い。

それでは、時間的な余裕が2時間になったら、子どもたちの選択傾向はどう変わるだろう

うか。その結果が、次の図15である。

全体として最も目につくのは、「外遊び」である。そして「まんが」はといえば、選択する子どもの割合はぐっと少なくなり、6項目中、下から2番目の位置にくる。

最近の子どもたちは遊ばなくなったといわれる。そして、室内にこもり、テレビやまんがといった必ずしも歓迎されない“一人遊び”

に時間を費やすことが多くなったと指摘されている。

しかし、このデータを見る限り、子どもたちの外遊びへの欲求はまだ失われていない。そして、むしろデータが語るのは、遊びのためにまとまった時間的余裕が確保できないでいる子どもたちの実情なのである。そして、まんがはといえば、細切れにされた生活スケ

図14 自由な時間・30分の使い方

|   |   | (%)  |        |           |      |       |
|---|---|------|--------|-----------|------|-------|
|   |   | 外で遊ぶ | テレビを見る | テレビゲームをする | 本を読む | 勉強をする |
| 男 | 子 | 23.4 | 17.2   | 23.1      | 5.7  | 7.7   |
| 女 | 子 | 19.4 | 26.0   | 3.9       | 18.1 | 7.9   |
| 3 | 年 | 26.0 | 14.2   | 18.2      | 11.3 | 11.3  |
| 4 | 年 | 23.0 | 17.9   | 17.9      | 9.4  | 7.7   |
| 5 | 年 | 23.5 | 18.7   | 10.3      | 13.9 | 6.8   |
| 6 | 年 | 14.5 | 32.8   | 10.7      | 11.4 | 6.0   |

ジュールのすき間を埋める格好の相手として、子どもたちに受け入れられているにすぎないのである。

図16には、性別・学年別に、30分と2時間の選択傾向を対比して示した。こうした時間的ゆとりの中では、子どもたちは、「まんが」と「テレビ」と「外遊び」の3つの中で揺れているように見える。2つの時間の長さに対

して、最も明快な使い分けをするのが5年生。そして、いずれの時間においても、テレビを選択する割合がかなり高い6年生。この年代の子どもたちの生活スケジュールがどうなっているか、改めて注目してみたい気がする。

図15 自由な時間・2時間の使い方

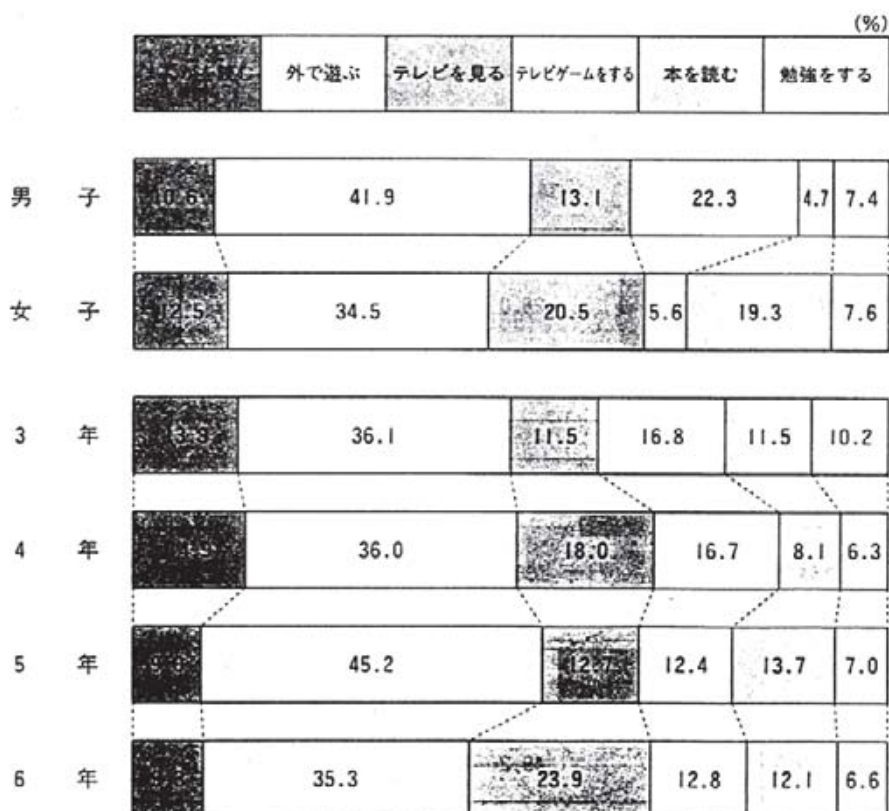
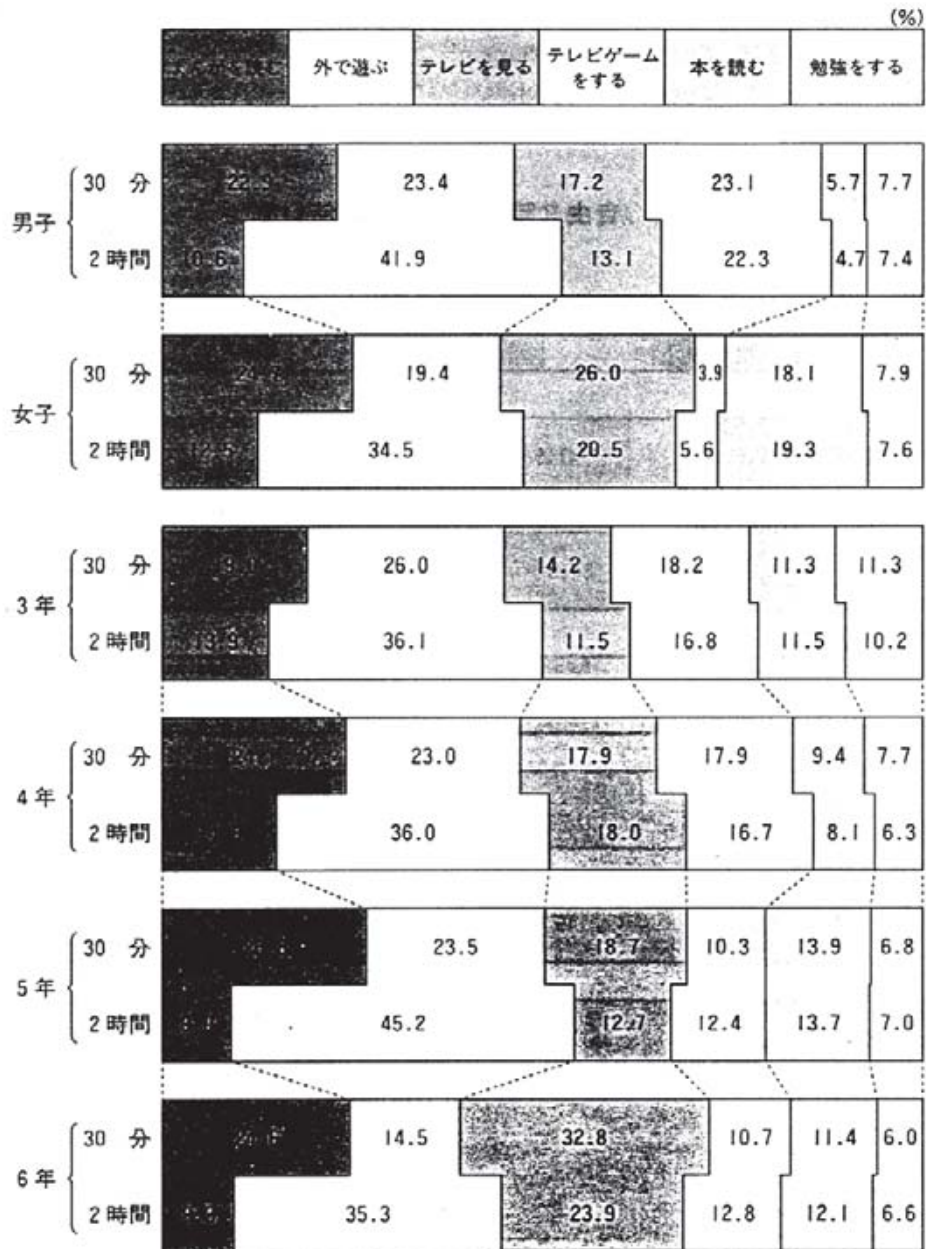


図16 自由な時間の使い方（30分と2時間の比較）



## 自由なお金の使い方

次に、自由なお金の使い方について考えてみよう。

最近の子ども市場に出回っている商品は、すこぶる高額になった。したがって、金額の設定にはかなり苦慮したのであるが、ここでは時間枠の設定に対応させて、500円と2,000円の2つにした。労働賃金の時給相場より幾分高めといったところである。

まず図17は、500円の場合である。

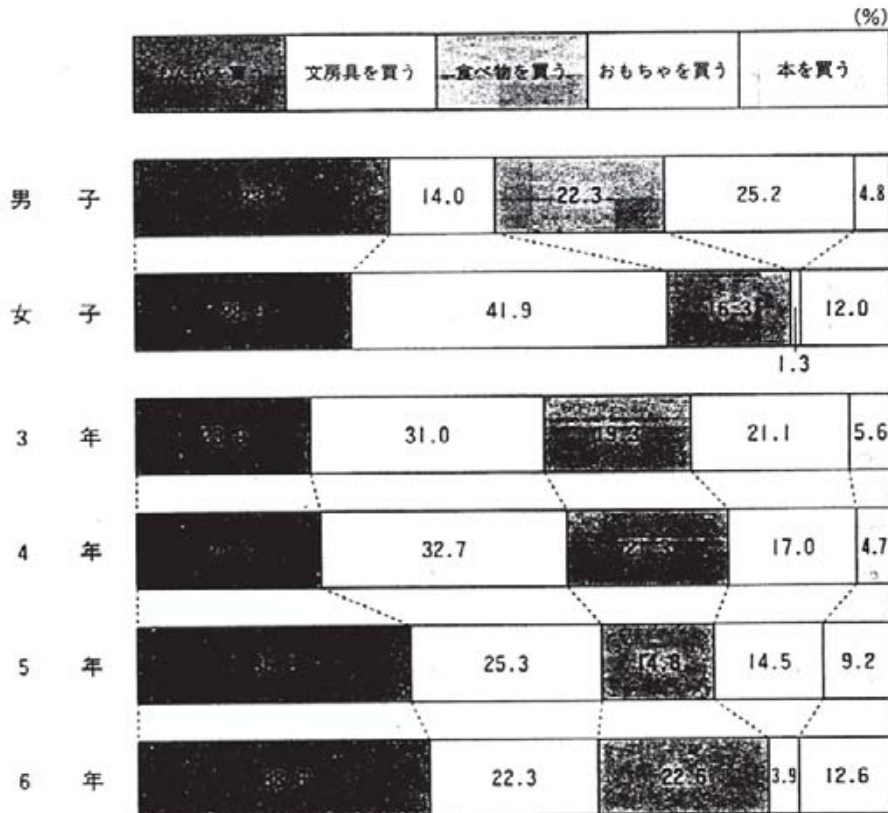
ここでは、顕著な性差が認められる。女子では、「文房具」と「まんが」でほぼ7割を占めるのに対して、男子では比較的に多岐にわ

たっている。上位から、「まんが」「おもちゃ」「食べ物」の順であるが、いずれも親の目からすればあまり歓迎したくないものであろう。

次に学年別に見ると、「文房具」と「おもちゃ」の選択率が低下し、その分がほぼまんがに吸収される。例えば、500円で買えるおもちゃには、6年生の子どもたちはそれほど興味を示さないのだろう。しかし、その分がまんがに吸収されていくのであれば、それほど意味は変わらない。

それでは、2,000円の場合はどうか。図18に示した通り、男子では「おもちゃ」が

図17 自由なお金・500円の使い方



他を圧倒し、女子が「まんが」「文房具」「本」の3つの間で揺れ動いている。そして、さすがに2,000円にもなると、男女とも食べ物(おやつを意味するが)には手をのばさない。

学年別に見ると、学年上昇とともに、「おもちゃ」から「まんが」べという移行が顕著にあらわれている。

時間の場合と同様に、ここでも、2つの金額を対比的に示した。図19がそれである。

それによると、他の項目では500円と2,000円の間はかなり差が認められるものの、「まんが」にはその差がほとんど見られない。そし

て、学年上昇とともに、まんがの占める比重は確実に大きくなっている。

子どもたちにしても、まんがを買うことにそれほどの意味を認めているわけではないのだろう。しかし、豊かで満たされた生活条件の中で、むしろ消去法の結果としてまんがだけが残っていくというのが実情なのではあるまいか。

その意味でいえば、時間の使い方と同様に、まんがは手頃な消費の対象として“生活のすき間”に位置しているのかもしれない。

図18 自由なお金・2,000円の使い方

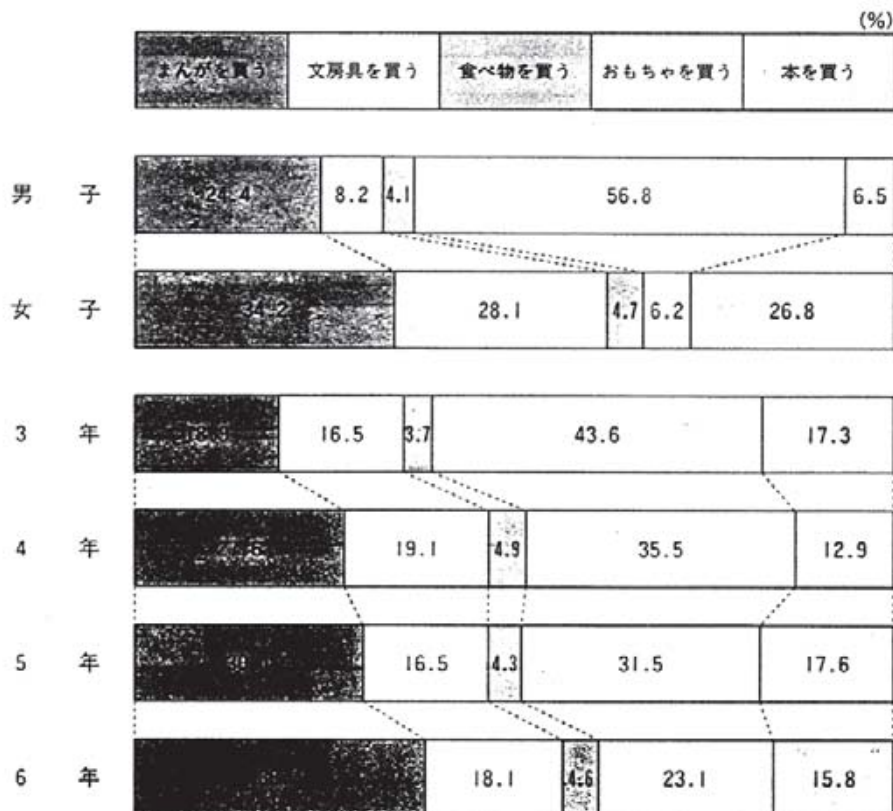
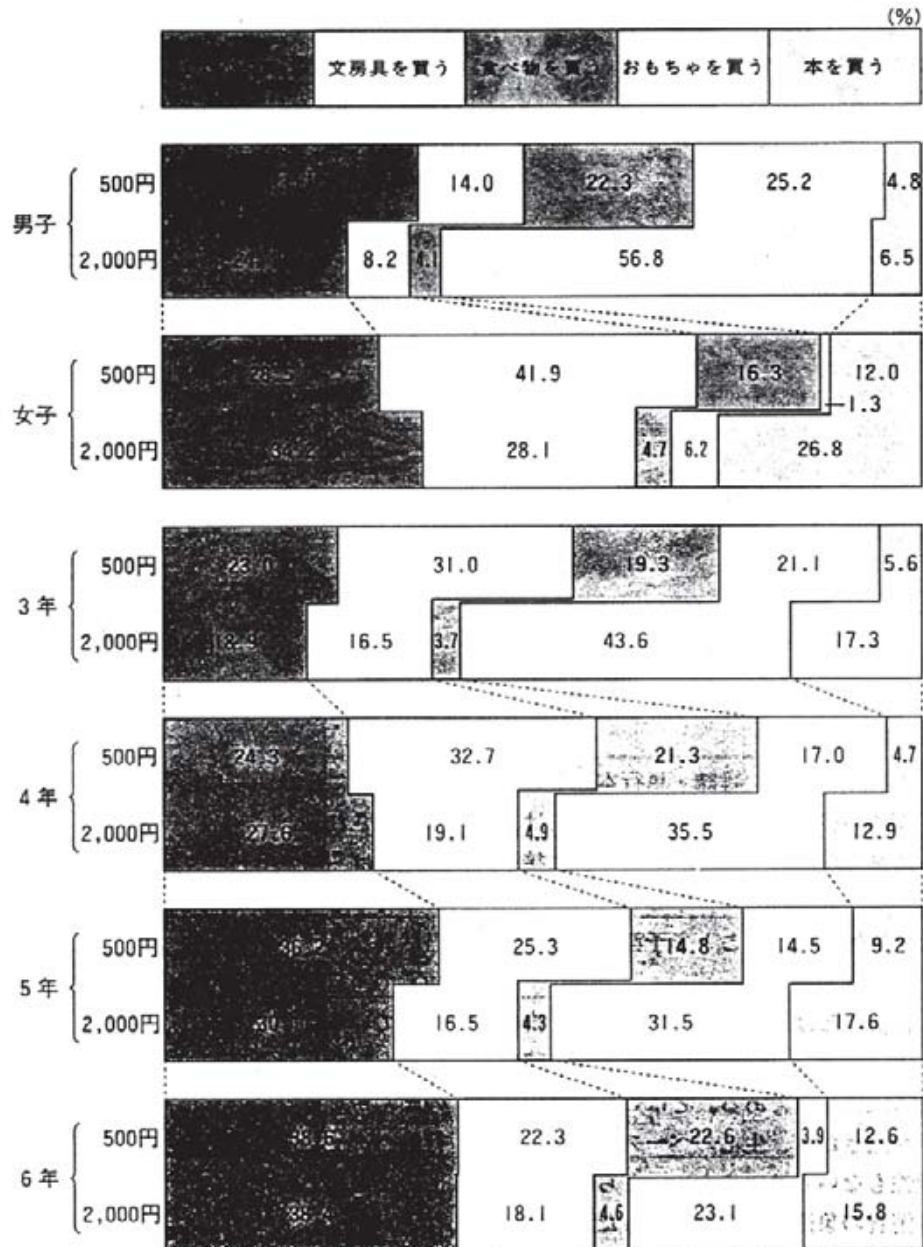


図19 自由なお金の使い方（500円と2,000円の比較）



## 4. まんがとつきあう子の特性



ここまでの報告では、雑誌・単行本・テレビという媒体の差にこだわってきた。それは、ひとくちにまんがといっても、それぞれに接触形態がかなり異なるため、子どもたちの生活に及ぼす影響も異なることを予測したからである。

例えば、テレビは原則として、時間的な拘束を受ける。一方、単行本は好きなときに読める点では大変便利である。とはいえ、熱中の度合いが過ぎれば、生活のペースを大きく乱す可能性もないとはいえない。さらに雑誌は、大量消費の象徴として、子どもたちの価

値観形成に少なからぬ影響を与えていることも予想される。

いわば“デパート型”の雑誌と、“専門店型”の単行本とでは、選択の仕方や接触の態度も当然異なり、テレビというワンウェイ方式も加えて、自律的態度の形成にも微妙な影響を与えているはずである。

そうした点を考慮し、本章では、それぞれのまんがを好む子どもたちのプロフィールや行動パターンの特徴を整理することでレポートのまとめとしたい。



## ⊕⊕ まんがの好みと自己像 ⊕

表6から表8は、まんがのタイプ別に、接触量によるプロフィールの違いを確かめようとするものである。なお、いずれもサンプル

が3等分に近くなるように3群に分けた。

まず、表6は、雑誌への接触量とプロフィールの関係を整理したものである。

表6 まんが雑誌を読む子のプロフィール

(%)

|               | 毎週2冊以上 | 毎週1冊くらい | とどきどき読むくらい |
|---------------|--------|---------|------------|
| 1. テレビが好き     | 94.4   | 93.6    | 80.4       |
| 2. 友だちがたくさんいる | 89.7   | 85.2    | 81.3       |
| 3. 明るい性格      | 80.3   | 77.2    | 74.4       |
| 4. まんがを読むのが好き | 94.1   | 86.9    | 55.4       |
| 5. 外で遊ぶほうが好き  | 75.6   | 73.2    | 78.8       |
| 6. 学校は楽しいと思う  | 68.7   | 68.5    | 74.4       |
| 7. 本を読むのが好き   | 73.1   | 73.1    | 66.6       |
| 8. 字の書き方がよくなる | 45.9   | 47.2    | 53.5       |
| 9. スポーツが好き    | 49.2   | 48.2    | 47.0       |
| 10. 算数の成績がいい  | 35.4   | 35.0    | 33.9       |

それによると、まんが雑誌を好きな子は、「テレビも好きで、友だちがたくさんいて、明るい性格である」というプロフィールを描いている。そしてわずかな差ではあるが、意外なことに、本を読むのも好きである。

一方、雑誌をあまり読まない子は、「外遊びが好きで、学校を楽しいと思ひ、家の手伝い

をよくする」子である。

次に表7で、単行本への接触量による違いを確かめると、概略は雑誌の場合と同じであるが、算数の成績との相関が幾分かは強くなる。そして、ここでも単行本を好きな子は本を読むのも好きだという傾向にある。

しかし表8に示したテレビになると、読書

表7 まんが単行本を読む子のプロフィール

|               | (%)      |        |          |
|---------------|----------|--------|----------|
|               | 週に3～5冊以上 | 週に1～2冊 | ほとんど読まない |
| 1. テレビが好き     | 93.9     | 89.4   | 80.9     |
| 2. 友だちがたくさんいる | 89.3     | 86.6   | 78.4     |
| 3. 明るい性格      | 80.0     | 75.3   | 76.8     |
| 4. まんがを読むのが好き | 92.6     | 80.9   | 50.4     |
| 5. 外で遊ぶのが好き   | 74.4     | 79.9   | 73.8     |
| 6. 学校は楽しいと思う  | 68.1     | 71.3   | 74.1     |
| 7. 本を読むのが好き   | 73.5     | 69.1   | 67.2     |
| 8. 家の手伝いをよくする | 46.0     | 51.3   | 50.8     |
| 9. スポーツが得意    | 50.4     | 51.7   | 41.4     |
| 10. 算数の成績がよい  | 34.0     | 32.3   | 39.1     |

の好き嫌いとは逆転する。

そうした細部における差については今後の検討課題として、3つのデータに共通的に浮かんできた傾向を整理してみよう。

まず、まんがと深くつきあう子は、当然のことながら、まんがが好きでテレビも好きな子である。そして、まんがと一定の距離を保

っている子は、学校が楽しく、家の手伝いをよくする子である。

まんがと適度なつきあいをと願うおとなたちの思惑は、おそらくこうしたプロフィールの違いを感じとってのことであろう。

表8 テレビまんがを見る子のプロフィール

(%)

|               | 毎日1本より多い | 毎日1本くらい | もっと少ない |
|---------------|----------|---------|--------|
| 1. テレビが好き     | 96.5     | 90.9    | 79.4   |
| 2. 友だちがたくさんいる | 83.1     | 87.6    | 86.2   |
| 3. 明るい性格      | 75.6     | 80.1    | 77.3   |
| 4. まんがを読むのが好き | 84.8     | 76.5    | 79.3   |
| 5. 外で遊ぶほうが好き  | 75.0     | 77.5    | 77.0   |
| 6. 学校は楽しいと思う  | 66.1     | 73.3    | 74.6   |
| 7. 本を読むのが好き   | 66.2     | 73.8    | 73.1   |
| 8. 家の手伝いをよくする | 41.6     | 51.1    | 55.6   |
| 9. スポーツが得意    | 48.4     | 52.3    | 45.2   |
| 10. 算数の成績がよい  | 34.4     | 31.6    | 36.4   |

## ☉☉ まんがの好みと行動パターン ☉☉

最後に、前章で紹介した30分の自由時間の使い方に関して、まんがとの接触量による差を整理した結果を紹介しよう。図20から図22がそれである。

3つのグラフを比較すると、雑誌(図20)と単行本(図21)の場合が、かなり似かよった傾向を示している。すなわち、雑誌や単行本への接触量の多い子は、30分の時間があれば、何よりもまんがを読もうとする。これに対して、どちらもそれほど読まない子は、その時間を外遊びやテレビ視聴、あるいは読書にあてようとする。とりわけ、読書をしようと思う子どもたちが3倍近くの数値を示している点に注目したい。やはりまんがと読書は、必ずしも両立しやすいものではないのであろう。

さて、図22に示したテレビの接触量による差は、他の2つと異なった傾向を示していて、

全体として、行動選択の傾向に大きな差は認められない。それだけ、テレビによるまんが接触が、多くの子どもたちにとって日常化していることを示唆しているのであろう。

そうした点を考慮してまとめるならば、雑誌や単行本という意図的なまんが接触は、子どもたちの日常に少なからぬ影響を与えていると推測できよう。それが、細切れのスケジュールのすき間を埋める存在として機能している程度であれば止むを得まい。しかし、10年前に実施した調査結果と合わせて考えれば、子どもたちがその一線を遠からず超えることも十分予想される。

細切れの生活スケジュールという現実とともに、改めて子どもらしい生活サイクルを確立させるという観点から考え直してみる必要があるのかもしれない。

図20 まんが雑誌を読む子の行動選択 (30分)

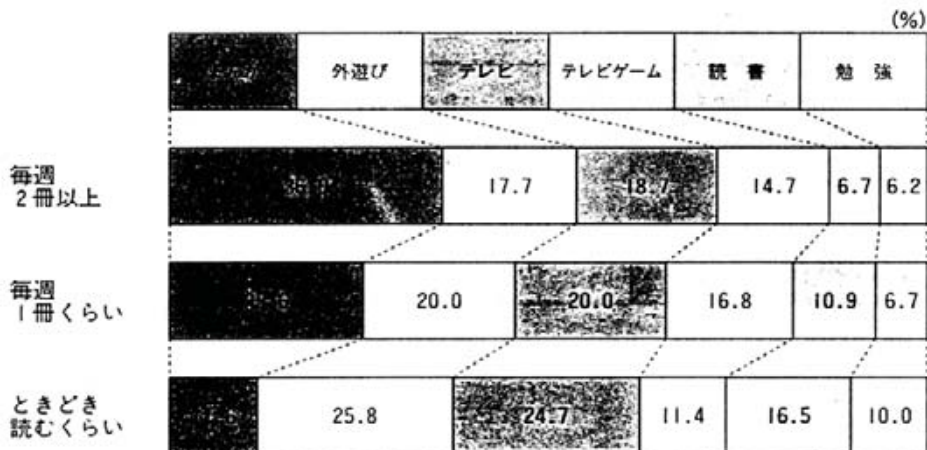


図21 まんが単行本を読む子の行動選択 (30分)

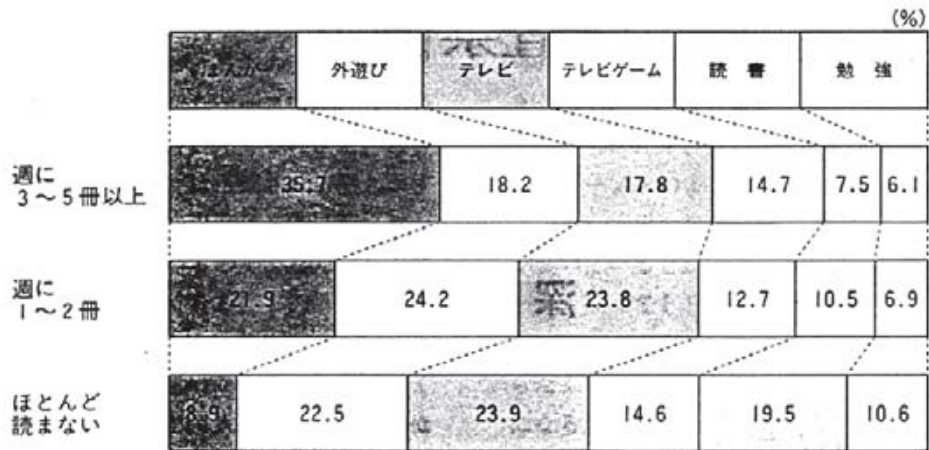


図22 テレビまんがを見る子の行動選択 (30分)

